

The Sound and the Fury における Compson 三兄弟の語りの翻訳

——4 翻訳の分析を通して——

Rendering Voices of Three Brothers of
the Compsons in *The Sound and the Fury* :
Four Translations Compared

Suganuma Sachiko
菅沼 幸子

要 旨

文学翻訳の場合、原作のテーマや雰囲気을できるだけ忠実に受け取りたい。なぜなら、原作とできるだけ同程度の価値のものを読みたいからだ。しかし、どうすればそのようなことが可能になるのだろうか。本稿では、翻訳に関する多様な要素の中から、文体に着目し、現存する翻訳を分析比較することによって、先達の知見を得たい。

本稿では、ST (Source Text) として、「意識の流れ」小説として特殊な文体で知られる William Faulkner (1897-1962) による *The Sound and the Fury* (1929) を取り上げる。この小説の各章の語り手で登場人物でもある三人の人物の、それぞれ特徴ある語りの文体を、1 パッセージずつ抽出した。個々の場面では、翻訳者の原文解釈の違いが翻訳文の違いとなって現れていることはあるが、どの翻訳者も原作のテーマや全体的な文体の雰囲気を翻訳に移動させるため、翻訳文の運びに工夫をこらしていることが、具体的な事例を通してわかる。

キーワード：文学翻訳、意識の流れ、語りの文体、原文解釈

はじめに

翻訳とは異なる文化によって立つ言語間の移動であることから、対称物を形成する

ように、原作とまったく同じ意味を伝えるということは不可能であるということは自明の理である。とはいうものの、文学翻訳の場合、翻訳読者 (Target Text Reader or TTR) は原作のテーマや文体が作り出すその小説全体を包む雰囲気をもできるだけ原作に忠実に受け取りたい。なぜならば、そうでなければ、TTR は原文 (Source Text or ST) と違う価値のものを読むことになってしまうことになるからだ。もっとも何をもって同じ価値というかという点においては、翻訳者が ST の文章を構成する個々の単語や文脈をどのように解釈したかに負うところが大きい。また翻訳手法に絶対というものはなく、翻訳文 (Target Text or TT) の表現にもさまざまなものがあって当然である。さらに、文体などの要素は当然個々の原作に固有のものであり、したがって翻訳手法もそれぞれに対応したものとなる。

小説家高村薫 (b.1953-) は『小説の現在地とこれから』と題した2018年の講演の中で、文体とは「個々の書き手の身体性」であり「方法論に落とし込むことができない」(高村 163) と言っている。これは小説を書くときの文体を言っているが、とはいえ、翻訳においても翻訳者自身にも固有の文体というものがあり、ST と TT の文体にはどうしても違いが出てしまうかもしれない。しかし、仮に原作者と翻訳者の間にそのような越えられない要素があったとしても、難問ではあるものの、TT 全体に ST から来るテーマや雰囲気がうまく移動されていれば文学翻訳は成功に近づくのではないだろうか。では実際にどうすればこの越えられない溝をできるだけ小さくする効果的な翻訳を得ることができるのだろうか。本稿では、ST の文体に着目し、実存する翻訳作品を分析考察することによって、この難問を解くための糸口を先達から得たい。そして、翻訳を検討する時の ST として William Faulkner (1897-1962) による *The Sound and the Fury* (以下 *TSTF* と略す) (1929) を取り上げたい。

このテキストは “April Seventh, 1928,” “June Second, 1910,” “April Sixth, 1928,” “April Eighth, 1928” と日付を章題とする四章からなっている。第1章は Compson 家の末子で知的発達遅滞の Benjy (Benjamin) によって、彼の意識の流れにそって、時間軸に拘束されず、過去のちょっとした日常の情景が思い出され語られる。第2章は Harvard 大学生の長兄 Quentin によって、彼が自殺する当日のことが語られる。その日の現実の出来事に、意識の流れにそって過去の情景の断片がからまり、彼の苦悩が表される。第3章は次男で3番目の子ども Jason の独白により語られる。Compson 家の兄弟には他に長女 Caddy がいるが、彼女は他の兄弟三人の物語の中心として存

在するものの、直接自分の内心を語ることはない。さらに最終章で全知全能の第三者、つまり作者自身によって Compson 家における章題の日における日常的な出来事が時間軸に沿って語られる。このような四人の語りにより、兄弟の子供時代から現在に至るまでの約 30 年間に於いて Compson 家が没落してゆく有様が物語の全体像として読者に伝えられる。全体的な構造としては、章を追うごとに、語りが提供する断片的な情報に補足的説明が重層的に加えられ、それによって登場人物の考えや出来事を最終的に読者にプロットとして理解させる手法がとられている。

上記の語り手の「意識」とは言葉に昇る以前の意識を含んでおり (Humpherey 2)、それを敢えて言語化しているもので、主語、述語の省略、句読点の省略、破格構文などのさまざまな技法が駆使されており、一見読者にはわかりにくい構成のように見える。また、文体の特徴として、語り手の連想に触発された意識の流れによって時間的な順序を考慮せずに場面が入れ変わるので、Faulkner は概ね場面転換のたびにイタリック体と普通の字体を入れ替えて使用していることや、違う場面での意識の中に前出と同じ文の断片が繰り返し出てくることにより、読者の場面想像に寄与している。

語り手の心の奥底にある言葉以前の意識を翻訳者はどのように解釈し、さらに翻訳上の問題点を克服しているのか、4つの翻訳を比較、分析し、実例を通して文学翻訳の実際に触れ、探ってみたい。Compson 三兄弟の語りの中からそれぞれパッセージを一つずつ抽出する。各語り手と当該パッセージについては後でもう少し詳述する。分析対象の各翻訳者と作品については以下の通りである。

表 1 日本語翻訳作品

出版年	翻訳者	翻訳者名省略形	題名	出版社
1969	尾上政次 (1912-1994)	O1	響きと怒り	富山房
1971	大橋健三郎 (1919-2014)	O2	響きと怒り	新潮社
1997	高橋正雄 (b.1921-)	T	響きと怒り	講談社
2007	平石貴樹 (b.1948-) 新納卓也 (b.1960-) (共訳)	H&N	響きと怒り	岩波書店

高橋正雄訳については、1974年に講談社から出版された世界文学全集にもあるが、

新版である 1997 年版の講談社文芸文庫版を今回の分析対象とした。翻訳者全員が題名を『響きと怒り』と訳出している。

では、各語り手と例文として抽出した箇所について概略を述べるとともに、4 翻訳を分析考察することにより、翻訳者の苦心の跡を辿ってみたい。各シーンはそれぞれの語り手の意識の流れによって突然場面転換するところを抽出した。これらはそれぞれの語り手の心奥に持つ願望を表すところである。ここでは、Benjy は母としての姉 Caddy、Quentin は母、Jason は家庭内での Quentin との等しい取り扱いを求めている。

第 1 章 April Seventh, 1928 における Benjy の語り

最初に第 1 章から、Benjy の川遊びの時の思い出を取り出してみよう。第 1 章は Benjy によって語られる。この例文は彼の意識下の過去の思い出ではあるが、既に何度かの場面転換を経ているため、ここでは原文でもイタリックでは表されていない。

例文 1

“I’ll run away and never come back.” Caddy said. I began to cry. Caddy turned around and said “Hush” So I hushed. Then they played in the branch. Jason was playing too. He was by himself further down the branch. Versh came around the bush and lifted me down into the water again. Caddy was all wet and muddy behind, and I started to cry and she came and squatted in the water.

“Hush now.” she said. “I’m not going to run away.” So I hushed. Caddy smelled like trees in the rain (19).

Benjy はお守役の黒人少年 Luster が “Aint you something, thirty three years old, going on that way . . .” (3) と述べているように、この時すでに 33 歳になっている。しかし、Benjy は知的発達が遅れて “You mean, he been three years old thirty years?” (17) と近所の黒人女性に確認されているとおり、知的レベルは 3 歳に設定されているものの、言葉を一切持つことができなかった。言葉を持たないということは複雑な思考をすることが難しいということでもある。しかし、意思が無い、もしくはある出来事に対する感情的対応がないわけではない。言葉の代わりに彼は crying, bellowing, moan-

ing などと泣き声で自分を表現することができるし、鋭敏な感覚を嗅覚、視覚、触覚において獲得している。例えば例文1のとおり、Caddy が “I’m not going to run away” と Benjy を安心させた時には、“Caddy smelled like trees in the rain” (19) と大きな安心を与えてくれる、母なる大地を想像させるような「木のようなにおい」を感じることが出来るし、一方で Caddy に異変を感じた時、つまり彼女が大人の女性になりかける時、Benjy は Caddy の抱擁を拒否するとともに、次のパッセージが示す通り、何事かを行動で要求することができるのである。“*She put her arms around me again, but I went away* (40) . . . *But I didn’t hush, and when she went away I followed, and she stopped on the stairs and waited and I stopped too*” (41) と。さらに、Faulkner は Benjy には善悪の意識もない (Cowley 131) と言っているが、その行動の良し悪しは別として、近所の女の子に向かって、“I [Benjy] was trying to say, and I caught her [a neighbor girl], trying to say, and she screamed and I was trying to say and trying . . .” (53) と一生懸命言葉を出して少女とかかわりを持とうとするなど、少し精神的に成長した姿を見せもする。が、この事件がもとで Jason に去勢されてしまう。物語上の Benjy の役回りは Faulkner が *The Paris Review Interviews* で “He [Benjy] was a prologue” (Cowley 131) と語っているように、時間軸に制限を設けず、なんらかのきっかけによって次々と思い出すシーンを紹介することによって、読者に物語全体に関する初期的な知識を与えることにある。この例文1のシーンでは、Benjy は Luster に川へ連れてこられ、Compson 家の召使 Roskus が「晩ご飯だよ」と子供たちを呼びに来たことに Caddy が「まだ晩御飯の時間じゃないわ」(17) と返答したことを思い出し、さらに連想的に子供時代の川遊びのシーンを思い出したと考えられる。

このシーンはこの物語の展望を象徴的に暗示する重要箇所である。Faulkner は “Introduction to *The Sound and the Fury*: 1933” において、この川遊びの場面からこの物語を書き始めたと言っている (12)。この場面には Compson 四兄弟がそろっているが、Jason だけがもう少し川下で他の兄弟から離れて独りで遊んでいる。この場面では、Caddy が “I’m seven years old” (17) と言っているのみで他の子どもの年齢はわからない。しかし、Faulkner による同じ時期の Compson 家の子どもたちが登場する別の短編、*That Evening Sun* (1931) の中では “I [Quentin] was the oldest, I was nine and Caddy was seven and Jason was five” (294) とあることから想像できるし、彼らが2歳違いの設定であることから Benjy はこの時3歳であろうとも類推できる。

Benjy を除いて、5歳程度の年齢になればある程度自意識も確立されているだろう。この時の出来事からは大人になってからの彼らの行動様式を想像することができる。例えば、Caddy がここで下着まで泥だらけになっていることは彼女の将来の恥辱を象徴して (Faulkner 1933, 13) いたり、さらに “I’ll run away and never come back” という発言からは永遠に故郷に帰れなくなることを暗示的に表している。また、この例1の場面の直前では Quentin の制止も聞かず Caddy が人前で洋服を脱ぐシーンもあって、Quentin は Quentin で Caddy を自分の思い通りに制することができないということ象徴し、さらに Jason のみが他の三人とは親しみのある兄弟関係を持ってないという、この四人兄弟の成人してからの関係をも象徴する場面となって、彼らのその後の人生の展開の方向性が示唆されている。

Benjy は言葉を持っていない、つまり適当な用語や表現方法を知らないため、第三者が彼になり替わって、彼が見たまま、感じたまま、あるいは過去の出来事を思い出すまにイメージ的に口述している。読者にはそれがいつの時点の出来事であるのか、また何を言っているのかを想像する労力と手間が必要とされる。しかし、文法的には概ね標準英語で語られ、主語述語の欠落など見られず、抽象的な単語も無い。全体的には短い文で構成されているが、少し長文を作る場合は短文を “and” で連結し続けるという、子供のおしゃべりのような表現である。例文1では、“and” 連結文、Caddy の一人称代名詞、“Hush now” そして後にも影響する “run away” など、それぞれの訳に着目して分析を試みたい。

まず初めに “and” 連結文の例として、“Caddy was all wet and muddy behind, and I started to cry and she came and squatted in the water.” の4翻訳を比較してみる。

O1: 「キャディーはうしろのところがビしょぬれで、泥だらけだった。そしてわたしが泣き出すと、近よって来て、水の中にしゃがみこんだ。」 (20)

O2: 「キャディーのお尻が^{しじ}ずぶ濡れで、泥だらけになっていたので、ぼくが泣きだすと、彼女はやってきて、水のなかにしゃがんだ。」 (281)

T: 「キャディが^{しじ}ずぶ濡れで背中が泥だらけだったので、わたしが泣きだすと、彼女がわたしのところへやってきて、水のなかでしゃがんだ。」 (36)

H&N: 「キャディはびしょぬれで、おしりも汚れていて、ボクが泣きだすとキャディは来て水の中にしゃがんだ。」 (Vol.1, 37-38) (下線 筆者)

O2 と T の3歳児があまり使いそうではない単語や漢字、「彼女」や「濡れ」以外

は、各翻訳とも画数の多い漢字を使わず、簡単な言葉で原文の雰囲気を出そうとしている。また、O1がSTにコンマがある箇所（“... muddy behind.”）のみ読点「。」にし、その次の“and”を接続詞「そして」でつないで、STに近い構成にしている。また4翻訳とも各文を切らないで連結することで、三歳児が話相手を認識しないで勝手に一人しゃべりするような時の、実際の話し方に近づけている。もっとも、Benjyは誰かに聞いてもらいたくてこの話をしているわけではなく、自分の無意識の中で「Caddyがぬれていて」、「お尻が泥だらけで」、というふうに次々と前の事に次の事が連結されて引きずり出されてくるので、そういう事態を想像するために、ここでの訳は日本語としては煩雑で不自然でも、「そして」、「そして」、と何度も同じ接続詞を使用して文を連結するのも一つの手法となるかもしれない。

翻訳の内容的にはBenjyの泣いた原因について、O2とTは「-ので」とCaddyのおしりが泥だらけであったためのように見えるが、少し前のSTの記述でCaddyが“I'm not going to run away”と言ってくれたので“So I hushed”とあるように、実際には、彼はCaddyが“run away”といったことに対して泣いている。但し、Faulknerは、CaddyがQuentinとの水かけっこで転んで服を濡らしたため、BenjyはCaddyが負かされたか傷ついたかしたと思って泣いた（1933, 12）と説明しており、そちらの説をとって訳しているのかもしれない。

次に、ここでの登場人物、BenjyとCaddyの一人称代名詞が気になる。Benjyについては既に拙論²にて述べたのでここでは省略する。Caddyの自己言及について、O1は「あたい」、その他の3翻訳は「あたし」としている。「あたい」は主に東京の下町で女性や子供が使用する。しかし、CaddyはJefferson（Faulknerが設定した物語の舞台である町の名）ではCompson屋敷と呼ばれる旧家の生まれであり、この時点では両親のことも“Father”，“Mother”と呼んでいるほどで、子供とはいえ下町言葉で自分のことを呼ぶようには馴れられていないと考えられる。

そして、“run away”をどう訳すか。O1は「逃げ出して」、O2は「とびだして」、Tは「逃げて行って」、H&Nは「家出して」と訳している。「逃げる」という語は面倒なことや嫌なことからは積極的に直面するのを回避するという意味合いがある。しかし、Caddyはそういう人間ではない。Quentinの思い出の中で、“she never was a queen or a fairy she was always a king or a giant or a general”（173）とあり、Caddyは常に強く誇り高い役回りを選ぶのだ。そういう彼女には「逃げる」は相応しくな

く、前向きな意味合いが籠った語句を選ぶのがふさわしい。

さらに、Caddy の Benjy を制止する言葉、“Hush now.” に着目したい。“Hush” はテキストに 191 回も登場し、複数の登場人物が Benjy の泣き声を制止するために使用するの、Caddy も誰か大人の言い方をまねるといことはあるかもしれない。しかし、“You’re not a poor baby . . . You’ve got your Caddy” (9) と子供ながらも全面的愛情を Benjy にそそぐ彼女が「お黙り」という強い制止言葉を使用するだろう。O1 と O2 は「さあ、お黙り」と「もうおだまり」、T と H&N は「さあ、泣かないのよ」というふうに分訳は 2 つに分れた。

そして、この川遊びのシーンは第 2 章で自殺を決行する直前の Quentin の意識の中にも出現する。“. . . Benjamin the child of mine old age bellowing. Caddy! Caddy! I’m going to run away. He began to cry she went and touched him. Hush. I’m not going to. Hush. He hushed. Dilsey” (88-89) と。Benjy は自分と Caddy との体験として語り、Quentin は目撃した話として語るという違いはあるが、Quentin が彼の精神の極限状態の時に、この Benjy と同じシーンを意識のかけらのように思い出すということで、このシーンは彼ら兄弟の大切な共通原体験として、Caddy を中心として、三人が強い絆で結ばれていたことが伺える場面である。さらに Caddy が二人に対する母親的役割を務めていることもわかる場面でもある。

初出である第 1 章の Benjy の語りの訳が後の Quentin の意識の訳にどう繋がるかを見てみると、表 2 のとおりである。

表 2 共通フレーズ (Benjy と Quentin) (部分) の翻訳比較

翻訳者	第 1 章 Benjy の思い出 “I’ll run away and never come back.” (19)	第 2 章 Quentin の意識の中 “I’m going to run away.” (88)
O1	あたい逃げ出して二度と帰ってこないわ (20)	あたい逃げ出してやるんだわ (93)
O2	とびだして二度と帰ってきてやらないから (281)	あたしとびだしてやるわ (342)
T	逃げて行って、もう帰ってこないわ (36)	あたしは家から逃げ出すわ (161)
H&N	家出して、二度と帰ってこないんだ (Vol.1, 37)	あたし、家出しちゃうもん (174)

O1 は「逃げ出して」、O2 は「とびだして」、T は「逃げて行って」、「逃げ出す」そして H&N は「家出して」と、4 翻訳とも “run away” に対する日本語の動詞を共通

にすることで、Quentin の意識中の訳を Benjy の語りの訳に準拠させていることがわかる。意識の流れのままに不完全な過去の断片を連続して表出する第 2 章の Quentin の語りの中で、Benjy の語りとは微妙に英語表現に違いをみせる ST に対して、Quentin の訳文を Benjy の訳文に準拠させることで、読者に例文 1 のシーンを思い出させている。

以上からわかることは、各翻訳ともこの例文 1 の場面の重要性に鑑みて、今後の Quentin の語りの中にも影響を及ぼすことができるように、何度も出現する文の翻訳を、意識的に構想していることがわかるし、ST の文体や単語レベルの翻訳など、人物設定に合わせて考えるとやや不自然と感ぜられるところもあるが、各翻訳者の解釈によって細部にもこだわりを見せていることがわかる。

第 2 章 June Second, 1910 における Quentin の語り

第 2 章は長兄 Quentin によって語られる。彼は今まさに入水自殺を遂げようとしている間際で、極限の精神状態にある。このような Quentin の無意識下の心の叫びを聞いてみよう。

例文 2

... opened the gasoline.

the first car in town a girl Girl that's what Jason couldn't bear smell of gasoline making him sick then got madder than ever because a girl Girl had no sister but Benjamin Benjamin the child of my sorrowful if I'd just had a mother so I could say Mother Mother It took a lot of gasoline . . . (172)

Quentin は Harvard 大学の 1 年生をちょうど終えようとしている時期にいる。Faulkner が長野セミナー (1955) で Quentin の役割を “it needs the protagonist, someone to tell the story” (Jelliffe 104) と言っているように、Quentin はその錯綜した意識の中で Benjy が語った思い出を補完するような形で、あるいは自分自身が Caddy と交わした会話や目撃した彼女の結婚式の時の出来事などを繰り返し意識の中に現すことにより、物語の全体像を説明していく。また、時間や人間に関する哲学的な考察、さらに Caddy の純潔をめぐる南部の女性に関する考察などについての父との会話

が何度となく、何らかのきっかけによって、連想が連想を呼び、彼の意識の中に奔流となって流れていく。このことから、彼と父親との精神的結びつきの大きいこととともに、その思い出の会話からは時には父に抗いたい気持ちも持っていたことがわかる。彼が意識の流れの中に埋没している時、文体は完結した文章ではなく、思い出の断片や、何かを暗示する単語のみで構成され、しかも句読点はほとんど使用されずに延々と続く。とは言うものの、前述したとおり、Faulkner は場面が変わる時には概ね字体を変えているし、何らかの関連を持った語から連想が続くことや、先に出てきたフレーズが繰り返して出現することも多いので、読者はその場面を想像しながら読み進むことができる。

Quentin は時間に対する強迫観念に取りつかれている。“I [Father] give it to you [Quentin] not that you may remember time, but that you might forget it now and then for a moment and not spend all your breath trying to conquer it” (76) と、この章の冒頭で父が諫めているにもかかわらず、時間の刻みから意識がはなれることができず、入水自殺を執行しようとする時刻さえもあらかじめ設定している。また、南部の淑女であるべき妹、Caddy の異性関係を許せず、その相手は不特定多数の男ではなく自分であって、Caddy と近親相姦をしたのだということにして、その事実を覆い隠そうとする。そんな恐ろしいことをすれば地獄に落ち、そこでは恐ろしさのあまり誰もいなくなるから Caddy と自分の二人だけの世界となると。“Nobody else there but her and me. If we could just have done something so dreadful that they would have fled hell except us. I have committed incest I said Father it was I it was not Dalton Ames [Caddy’s first lover]” (79) というのが彼の理屈である。そして “my murmuring bones and the deep water like wind, like a roof of wind, and after a long time they cannot distinguish even bones upon the lonely and inviolate sand. Until on the Day when He says Rise” (80) と死後の神話的な永遠の平穏を欲しているようである。

そして、母親との関係について言えば、“your mother’s dream for sold Benjy’s pasture for” (102) とあり、長男 Quentin を Harvard に入れることは母親の夢であったことがわかる。しかし、その夢は果たして母性愛からの夢であったろうか。Quentin の Harvard 大学の学資と Caddy の結婚式の費用として、Compson 家の屋敷を除く最後の資産である Benjy の大好きだった pasture が売却された。この一件からは Compson 家が経済的に立ち行かなくなってきたことがわかる。また、母親は、“Benjamin

was punishment enough for any sins I have committed . . . for putting aside my pride and marrying a man who held himself above me” (103) と、自身の結婚について自分が Compson 家と比較してけっして劣らない家格の Bascomb 家出身であることを自負している。それなのに、その自尊心を捨ててまで自分を下目に見る Jason Compson と結婚したため、その罰として障がいのある Benjy を授かったと考えていることや、夫の支配的な態度に不満を述べているところからは、彼女の満たされない結婚生活への思いも見て取れる。また、家柄が比較対象となっているところからは彼女が世間体を重要視していることがわかる。子供たちの養育は主に黒人召使の Dilsey が担っていたこともあり、彼女は Jason だけを “Jason pulling at my heart all the while” (103) と別格扱いし、従って、Compson 家の他の 3 人の子どもたちには母親らしい愛が充足されていなかったことであろう。

例 2 の場面は、このような母の愛の不在に対して、Quentin のそれを求める心の声 が表されているところである。時刻はもう間もなく自殺の設定時刻の 30 分前となり、出かける準備をしている。ベストに付着した血の染みをガソリンで除去しようとしているとその匂いから連想が飛躍する。“gasoline” の後ろにピリオドが打たれ、ここでいったん文が終了したことがわかる。そして、改行され、新たな文が始まったかのように見えるが、ここから Quentin の意識の奥へ無意識に入ったことを示すためか、文の冒頭が小文字で始まっている。まとまった文章ではなく、細切れの単語やフレーズばかりであるが、それぞれの言葉の象徴性を考えると、話し手とその時の状況が類推でき、翻訳を考える時の鍵となる。まず “gasoline” の繋がりから、母が自慢した Caddy の車を思い出す。“the first car in town” は Caddy の結婚相手の Hervert Head が彼女に買い与えたものである。“it’s her car aren’t you proud of your little sister owns first auto in town” (93) と母親がうれしそうに自慢している。車から Jason のことが連想される。母が “You know gasoline always made you sick . . . Ever since you were a child” (238) と言っているように、Jason はガソリンの匂いで頭痛を引き起こすのである。さらに Caddy の結婚は失敗に終わり、Jason は Hervert が約束していた銀行の仕事が約束が履行される前にして失うことになる。このことは Jason に取って許しがたく、Caddy に対して激しい怒りがこみあげるのである。そして Benjamin という名前からまた母が思い出される。母は絶対に子供を Benjy とか Caddy とかの愛称では呼ばず Benjamin とか Candace と正式名で呼ぶ。なぜなら、“Nicknames are vulgar.

Only common people use them” (64) と、母は、現実には衰退の一途をたどる Compson の妻であり母であるのに、未だに過去の幻影を引きずる階級意識に囚われ、自分を上流階級の者と位置付けており、愛称は庶民のもので、自分たちは使わないものだと考えているからである。次にはこの場面の少し前に出て来る母の言葉 “Benjamin the child of mine old age bellowing” (88) が重ねて思い出されて、“Benjamin the child of my sorrowful” と若干表現を変えて現れる。そして、母の言葉の思い出から Quentin の “Mother Mother” という母を欲する心の叫びへと続く。その後、意識の流れによっていったん途絶えていた目の前にあるガソリンの話に戻る。それでは、各翻訳を印刷形式、“Girl had no sister but Benjamin” の解釈、そして前にも出て来た母の同じような言葉 “Benjamin the child of my sorrowful” の訳について順次辿ってみよう。

まず、4 翻訳の文字の印刷形式を観察すると、4 翻訳とも原文がイタリックであることと句読点がないという形式を日本語でも何らかの形で踏襲している。O1 は活字のポイントを下げ、次のガソリンに話が戻るまで句読点なしで続けている。O2 はゴシック体にして、句読点の代わりに語句の切れ目と思われる個所で一字あけている。T は字体を右肩上がり斜体にして語句の切れ目で一字あけている。H&N もゴシック体にして語句の切れ目で一字あけている。読みやすさという点では切れ目ごとに一字あけている方が日本語の意味は取りやすい。ただ意識の連続性という点では Quentin の語りはそんなにポツポツとは切っていない。そして、小文字で文の冒頭が始まっていることについて言うと、英語では冒頭は大文字で始めるという規則があるから特異に見えるし、そのことによって、Quentin が無意識中に入り込んだことが、その見た目によって読者にも理解しやすい。しかし、日本語にはそれに対応する表記がないため、これを見た目どりに翻訳することは言語的には限界と考えられる。とはいうものの、全体の雰囲気を出すという点において、ほかの方法を創出する可能性はあるし、既存の翻訳は ST にもある印刷形式を変えるということ踏襲し、Quentin が無意識下に没入したことをよく表現している。

翻訳文全体の文体を見ると、T のみ、「その点なんです」と「です」でおわっているところと、「かんかんになるんですよ」と「よ」でおわっているところが見られる。この 2 点は誰か聞き手を想定しているように思えるが、果たして Quentin の意識の中では他人の聞き手を想定しているのだろうか。「意識の流れ」小説では登場人物の脳

裏だけで意識ともいえないほどの意識が連綿と交錯し、Humphrey：石田訳（45）にある通り、第三者の聞き手は想定外なのではないだろうか。

次に、例文2中の一節、“*Girl had no sister but Benjamin*”の解釈についてである。この文は幾通りかの解釈が可能である。「意識流れ」の文中では句読点が省略されたり、不完全な文であったりすることがあるということはすでに述べた。ということは、読者の解釈により文中の適当な位置に適宜句読点を補うことが可能であり、例えば、この文を“*Girl*”と Quentin が知り合いの男性の誰にでも発する「妹があるか」という質問の一部である“*had no sister*”と“*but Benjamin*”の三つに分けることができる。または、“*Girl*”と“*had no sister but Benjamin*”の二つに文を分けると、誰かに妹はいないが Benjamin はいると読める。もしくはこの文を完全な文、“*Girl had no sister but Benjamin*”として読んで、“*Girl*”に妹はないが Benjamin はいるというような意味合いの可能性もある。4 翻訳を比較すると下記の通りである。

O1：「妹は持っていなかったしかしベンジャミン」(174)

O2：「娘っ子が 妹をもったことがなかったのだ でも ベンジャミン」(416)

T：「女の子 妹なんか持ったことはない でもベンジャミンがいる」(302)

H&N：「小娘のくせに 妹を持ったことはない だけどベンジャミン」(Vol.1, 331)

この中では T のみが「でもベンジャミンがいる」(下線筆者)と妹はなくともベンジャミンはいると訳し、文を完全なものと解釈しているようである。T 以外の訳ではベンジャミンで文が終わって、彼ががどうしたかについての言及はないが、O1、O2、H&N はこのフレーズの初出を意識しているのか Benjamin が後ろの母の言葉“*the child of my sorrowful*”にかかっているような選択をしているように見える。

そして、母の言葉、“*Benjamin the child of my sorrowful*”に着目したい。このフレーズの初出は“*Benjamin the child of mine old age bellowing*” (88) で、両方の翻訳を比較すると下の表3になる。

表3 初出と例文2における共通フレーズの訳の比較

翻訳者	初出	例文2での Quentin の意識の中
	“Benjamin the child of mine old age bellowing” (88)	“Benjamin the child of my sorrowful” (172)
O1	わが年寄子 ⁽²⁰⁾ ベンジャミンがわめき立てている (93)	わが悲しみの老年子 ^{としよりご} ベンジャミン (174)
O2	わが年寄子 ^{としよりご} なるベンジャミン (訳注) (342)	わが悲しみの老年子 ^{としよりご} なるベンジャミン (416)
T	ベンジャミン わたしの老後に生まれた子供がわめいている (160)	わたしの悲しい老後に生まれたベンジャミン (302)
H&N	「わが年寄子 ⁽²¹⁾ 」ベンジャミンがわめいている (Vol.1, 174)	ベンジャミン 我が子よ悲しみに満ちた (Vol.1, 331)

Tを除く各翻訳とも初出の“*the child of mine old age*”を「わが年寄子」と訳し、読者の理解を助けるため、出典を『創世記』であると訳注で説明している。Tは訳注を付けるかわりに「老後に生まれた子供」と解り易い日本語で説明している。そして実際の後出のSTは“*sorrowful*”で文は終わって“*mine old age*”は無い。H&Nは後出のSTに沿った訳となっているが、他3翻訳は「年寄子」、「老後に生まれた」と先出の翻訳に準拠している。

さらには“*if I'd just had a mother so I could say Mother Mother*”に注目したい。彼の母を求める心がこの言葉を再び意識の中に出現させていると思われる（初出は“*If I could say Mother*” (95)）。この部分の訳を比較してみたい。

O1: 「ぼくにお母さんお母さんと言えるような母があったのなら」 (174)

O2: 「ただぼくに母がいさえしたら 母さんと言うことができるように 母さん」 (416)

T: 「もしぼくに母がいさえしたら そうしたらぼくだっていえるんだ おかあさん おかあさん」 (302-303)

H&N: 「もし僕に母親さえいたら お母さん お母さんと呼べさえしたら」 (Vol.1, 331)

この中でTのみがひらがなで「おかあさん」と呼んでいる。TはMotherの訳は常にひらがなの「おかあさん」なので、この場面だけが特別ではないが、Quentinは時にはラテン語も交えた会話をするほどの高等教育を受けているのに、なぜ母をひら

がなで表しているのかを考える時、「おかあさん おかあさん」と絶唱で文を終わらせることにより、この場面では幼子のように母をひたすら求めている状況がわかり、感情の高まりがより強調されているように思われる。

以上、Quentin の語りからの抽出例を見てきたが、Quentin の意識の流れによる特殊な文体の訳について、各翻訳者とも、ST にある印刷フォントの工夫を日本語でも可能な形で踏襲しつつ、文体も ST に即そうと努めていることがわかる。

そして、この例文 2 は誰かの言葉の思い出を Quentin の意識の中で連綿と綴ることで構成されている。それぞれの文の切片が何を表しているのかは Quentin にしかわからないが、翻訳は言葉を紡ぎ出さねばならず、各翻訳者とも ST のすべてを照合しながら、内容的にも適合する解釈を駆使して、翻訳文を創出していることがわかる。

第 3 章 April Sixth, 1928 における Jason の語り

第 3 章は次男 Jason によって語られる。彼は常に今の現実しか見ていない人物であるが、それでも心に秘めた願望はあるのだ。では、Jason の心の声を聴いてみよう。

例文 3

... Earl chasing back and forth like a hen in a coop, saying “Yes, ma’am, Mr Compson will wait on you. Jason, show this lady a churn or a nickel’s worth of screen hooks.”

Well, Jason likes work. I says no I never had university advantages because at Harvard they teach you how to go for a swim at night without knowing how to swim and at Sewanee they dont even teach you what water is. I says you might send me to the state University ; maybe I’ll learn how to stop my clock with a nose spray and then you can send Ben to the Navy I says or to the cavalry anyway, they use geldings in the cavalry. Then when she sent Quentin home for me to feed too I says I guess that’s right too, instead of me having to go way up north for a job they sent the job down here to me and then Mother begun to cry ... (195-196)

Jason は常に怒りの中にいる。長男の Quentin は家の牧草地を売却して大学に入ることが出来た。が、しかし、Jason の場合は母が When they began to sell the land to

send Quentin to Harvard I told your father that he must make an equal provision for you (262) と言っても、実際にはそうはしてもらえなかった。さらに、ここで母の回顧は続いて、残った牧草地や家具までも売った (262) とあるから、Compson 家の経済状態は窮乏の域にまで達していたことがわかる。そして、第 2 章の Quentin の箇所ですべたように、Caddy の夫 Hervert に斡旋してもらえないはずであった銀行の仕事も Caddy が結婚前に不身持であったせいで離婚されてふいになってしまった。そのことで、Jason は Caddy に深く恨みを持つこととなり、その報復として、Caddy の庶子の娘、Quentin に “Whatever I do, it’s your fault . . . If I’m bad, it’s because I had to be. You made me. I wish I was dead. I wish we were all dead” (260) とまで言わせてしまうほどつらく当たる。最後には残った母親の世話と Caddy の娘 Quentin の養育が Jason の仕事になっているのである。しかし、Jason は母親をだまして Caddy から送られていた Quentin の養育費をくすねて隠し持っていた。

また、Jason は子供の時から金に執心していた。そして、“I say money has no value; it’s just the way” (194) と金に対して論理的思考をしている時もあるが、小金を投機しても失敗続きである。結局、隠し持っていた金も Quentin に持ち逃げされてしまうし、金儲けについては常に不成功に終わる。

Faulkner は、長野セミナーで、Jason のことを “complete evil” で “the most vicious” (Jelliffe 104) と説明している。実際彼は誰に対してもあくどい。とは言うものの、生得の性質に加えて、Compson 家の没落という不運と両親の不仲が彼をこのような人物にした要因でもある。Jason の生い立ちを考えると、Jason のみが母の実家の Bascomb の血を引いていると母によって常に言い聞かされ、Compson 家の他の兄弟とは Benjy の思い出 (例文 1) の中でも 5 歳にしてすでに川遊びを独りでしているほど精神的に分断されている。母親の考えでは、Quentin と Caddy については “How can I [mother] control any of them [Quentin and Caddy] when you [father] have always taught them to have no respect for me and my wishes I know you look down on my people” (96) という風に父親に育てられ、Benjy は母にとっては前述したとおり、天罰として生まれてきた子どもであった。Jason のみが “he has never given me one moment’s sorrow since I first held him in my arms I knew then that he was to be my joy and my salvation” (103) であり、“they’re [Quentin, Caddy and Benjy] not my flesh and blood like he [Jason] is” (104) なのである。さらに母は “Damuddy spoiled Jason

that way and it took him two years to outgrow it” (63) と Jason を祖母の Compson 家の養育方針から Bascomb 流に取り戻すのに 2 年かかったと述べている。要するに母親は Jason を自分の家庭に対する不満の逃げ場としていたと言える。そのような育ち方は Jason の性格形成に大きく影響したことであろう。

そして、今では現実の家長は Jason であるのに、この母親は “. . . I never let anyone take my keys” (282) と未だに家の中の各部屋の鍵を自分の手中に握っている。彼の結婚さえもこの母は “I’ll be gone soon and then you can take a wife but you’ll never find an woman who is worthy of you” (246-247) と規制している。内心では母親に対してぶつぶつ文句を言っている Jason も、そのような母親に対して正面切っては何事にも反対できないのである。

Jason は実務的な人物であり、兄の Quentin のように内省的に自分を深く考察するということはしない。したがって、彼の語りは、時には段落が長いこともあるが、通常は、あまり複雑な構文では構成されていない。何事に関しても皮肉な見方をしているため逆説的な物言いが多いが、文章そのものは論理的であるし、時間軸もずれてはいない。Jason は今では上流階級から零落し、町で荒物屋の店員となっている。話し方は店主の Earl に対して敬称もつけずに呼び、Benjy のことも Ben と短く見下したような表現をし、母親と話す時以外は全体的に荒っぽい。また、語りの時には “I says” と動詞 “say” に非標準の三人称単数 s を付けるし、常に歴史的現在時制を使用している。そして、“dont” のような非標準表記の視覚方言を用いる。但し、この程度の非標準綴りは Mrs. Compson も Quentin も使用している。

例文 3 の場面はある女性客の相手を Earl から命じられた時のことに引き続く彼の独白である。まず、この独白を誘発した “Well, Jason likes work” の発話の主は誰かということについて考えてみたい。

O1: 「とにかくジェーソンは仕事が好きなのでね」 (198)

O2: 「とにかくジェイソンは働くのが好きなんでね」 (437)

T: 「本当にジェイソンは働き者だよ。」 (343)

H&N: 「『ええ、ジェイソンは働くことが好きなんです』・ ・ ・」 (Vol.2, 38)

H&N を除く 3 翻訳は発話の主が男性のようだ。H&N だけは語尾を「-の」で終わることによってこの発話の主を女性としていることがわかる。店主のことを「牝鶏みたいにはたばたと」 (195) と内心でけなしていると客の応対を命じられた、という

この場面を考えると、この語は客に対する Earl の発話であるとも考えられるし、仕事を命じられたことに反応して自分で自分のことを諧謔的に揶揄しているのかもしれない。しかし、例3の最後の行をみるとわかるが“then Mother begun to cry”と続くので、このシーンでは、母の過去の言葉を思い出したことによって、内心で母に対して、いつものように大学へ行けなかったという彼の運命への怒りをぶちまけているようにも考えられるので、これは母の言葉であったと解釈することも可能である。

次に、一般的に過去の出来事を今の事のように生き生きと表現することが出来ると言われている歴史的現在時制と南部なまりで表現された Jason の否定の言葉、“I says no” に注目して4翻訳を比較してみたい。

O1:「ところがどうしてどうしてとおれは言う」(198)

O2:「ときやがる。いいや、とおれは言ってるんだ」(437)

T:「いや、とおれはいう」(343)

H&N:「だだよ、『とんでもない』って俺は言ってるのさ」(Vol.2, 38)

Jason の現在時制の翻訳全体をとおすと4翻訳とも現在過去混交だが、この場面では H&N を除く3翻訳は日本語訳でも現在形を使用している。日本語でも現在形を使用することによって、Jason がいつもそう言っているという状態を表すことが出来る。だが、H&N のように過去形にすると自然な日本語になるということもある。「仕事好き」と言われたことに対する反応については、T はやや平板だが、他3翻訳では Jason は激しく、しかもやや粗野な感じになっていて、彼の日ごろの話しぶりを考えると適当なことがわかる。ただ、どの翻訳も黒人たちの黒人英語による発話には日本の田舎風な方言を使っているのに対して、黒人登場人物に比較して方言の強度は低いというものの、Jason の使用している非標準英語の“says”には、O2の「ーやがる」という相手の動作などを軽蔑的に、もしくはののしったりする表現や、H&Nの軽く感動をあらわす「一のさ」などの東京弁風な方言が見られる。

そして、“you might send me to the state University” に着目して4翻訳を比較してみたい。Appendix *Compton: 1699-1945* で Faulkner が説明しているところによると、父親は飲酒が原因で死亡したとはいえ、元々は弁護士事務所を開いていたということだ。この例文3の中にも Sewanee とあるから University of South を卒業しているだろう。兄の Quentin は Harvard へ行かせてもらえた。Jason 自身は Appendix によると Memphis school へ行き、“he learned class and grade cotton” (339) と店員の給料から

の貯蓄で自らを教育せねばならなかった。Jason は、Compson 家がもう経済的に彼を大学へやることができないということは十分承知してはいただろうが、そればかりではなく、長兄 Quentin を Harvard へやることは一家の夢であったが、次男である Jason にはそういう夢は託されておらず、そこにも彼のくやしさがうかがえる。

O1: 「せめてぼくを州立大学にやってくれたっていいじゃないか」(198)

O2: 「まあおれを州立大学（訳注 ミシシッピ州立大学。オックス・フォードにある）へでもやってみたらどうだ」(437)

T: 「あなたはぼくを州立大学にやりゃあよかったのに」(343)

H&N: 「俺を州立大学に行かせてくれてもいいじゃないですか」(Vol.2, 38)

大学納付金について、文部科学省の諸外国の教育統計で見ると、2019 年度版で Harvard 大学は年間 46,704 千円、州立大学は平均 27,942 千円である。もちろん Jason の時代とは貨幣価値などが大きく異なるだろうが、このような金額的な差は同様であったことだろう。せめて授業料が安く、家からも近い州立大学にでも行きたかったという Jason の気持ちを表しているところなので、O1 の「せめて・・・やってくれたっていいじゃないか」と H&N の「・・・くれてもいいじゃないですか」はその気持ちがよく訳出されている。また、O2 の「やってみたらどうだ」からは Jason のいら立ちがよくわかる。T のみは“you”を具体的に「あなたは・・・」と訳出している。この ST 中ではあなたに相当する人は母親しか考えられないが、母親に頭の上からない Jason も、内心では何もしてくれない母親に対して文句を言っているという解釈もできる。

ま と め

これまで *TSTF* をテキストとして一パッセージずつのみではあるが、Benjy、Quentin、そして Jason のそれぞれ特徴的な三人三様の語りのスタイルと語っていることの内容、また、意識の流れの文体に特徴的な、突然場面転換する箇所に着目して、分析対象を抽出し、4つの翻訳を比較分析してきた。例えば Benjy の語りは短い文が“and”で連結される。Quentin の語りは句読点などを省略して連綿と続く。そして二人の語りは時間的順序に拘束されていない。Jason の語りは“I says”と常に歴史の現在時制で、しかも非標準 s の付加がある。

Faulkner の創出したこのような文体を日本語にそのまま訳し移すことは難しい点が

多いことがわかった。しかし、それでも、分析対象のパッセージの中で、個別の文ごとに見ると、翻訳者によって解釈や細部の表現の違いなどは見られたものの、4 翻訳ともそれぞれの語り手の特性や全体的な文脈に沿って、文章全体から受ける雰囲気やうまく移すことに成功している。本稿で試みた 4 翻訳それぞれの翻訳者の努力の跡を辿ることによって、原文解釈や翻訳の技法について得るところが大きかった。

まず Benjy の川遊びのシーンでは、単純な文が“and”で続けられるというのが特徴である。各翻訳とも短い文を自然に連結して、実際に三歳児が話すような訳としている。しかし次々と現れる Benjy の無意識中のことを考えると、「そして、」「そして、」と文を連結するのも一つの手法かと考えられる。さらに、この場面での重要人物 Caddy に着目し、彼女の自称詞、“run away”そして“hush”の翻訳について、Caddy の人物設定に沿って考察した。この場の状況は後の長兄 Quentin の意識にも大きく影響しているので、後に読者がこの場面を類推できるように翻訳が工夫されている。

次に Quentin の語りの場面は、ガソリンの匂いをきっかけとして次々現れる登場人物の言葉の断片を連綿と続けることによって、ついに母へと意識が到達し、彼の母を求める意識として強く表現されている箇所である。ST もイタリックで、句読点なしで意識の流れに従って連綿と小文字で始まる文章が繋がっている。その外形的形式に従って 4 翻訳とも句読点なしで、一字あけたり、フォントや字体を変えたりしている。翻訳文体を見ると、T のみ聞き手を想定している訳となっているが、自分の意識に閉じこもっている Quentin は多分聞き手のことは想定外であろう。また、文をどう読み取ればいいのか判然としないのが Quentin の語りの特徴だが、“*Girl had no sister but Benjamin*”を例にとると、翻訳によって Benjamin が後ろの文へ掛かると解釈しているものや、文をそのまま切らないで、正当な文と解釈したと思えるものがあった。さらに、近似のフレーズ“the child of mine old age”と“the child of my sorrowful”のように、実際には ST に少しの違いがある時、読者に前出のフレーズであることを知らせるためだろうか、ST にはないが前出と同じフレーズを用いるか、もしくは ST に沿ってそのままに訳すかという二者択一があった。

最後に Jason の語りである。Jason は実務的で Quentin のように悩まないのも、それほど複雑な意識の流れはなく、やや長い独白は続いて文章は論理的である。とはいうものの、“Well, Jason likes work”の発話主体に注目したところ、翻訳者によって

男性と女性の二通りの解釈が見られた。そして、Jason の歴史的現在時制の語りに注目すると、この例文翻訳の中では、O1、O2、T の現在形と H&N の過去形に分れた。日本語でも現在形にすると Jason がいつもそう言っているという状態をあらわすことができるし、過去形にすると日本語として自然な感じを与える。次にまた、“you might send me to the state University” の訳に着目したところ、4 翻訳ともそれぞれの解釈に基づいて大学へ行きたかった Jason の強い願望を代弁する効果的な翻訳が見られた。

Faulkner の文体をそのまま異なる言語である日本語に置き換えることには様々な困難があることが見込まれる中で、4 翻訳を比較分析する過程において、ST 全体のテーマや雰囲気をうまく日本語に移動させるという点で、さまざまな手法が駆使されていることが発見された。また、特に、本稿における分析対象である「意識の流れ」小説のように、句読点や、主語の省略、もしくは単語のみでの構成などがある特殊な文体では、そもそもの ST 解釈に幾通りかの可能性が考えられるし、それをどの様に解釈するかは翻訳者に任されるほかない。従って、個々の文章の翻訳には翻訳者によって多少の差異が認められることは当然である。

しかし、そうであっても、小説全体のテーマや雰囲気を上手く TT に移動させられれば、TTR はその小説の全体像を受け取ることが出来る。そのためには、翻訳者がテーマや全体の雰囲気をどう捉えるかが重要になって来る。Dostoevskii (1821-1881) 作品をドイツ語に訳した翻訳者 Svetlana Geier (1923-2010) も、ドキュメンタリー映画、『ドストエフスキーと愛に生きる』(2014) の中で「翻訳は常に全体から生まれるもの。文章の全体を自分の中に取り込む」(Jendreyko 字幕から)と言っているように、ST の全体的なテーマと雰囲気を翻訳に移すことが大切である。今後とも引き続き研究の課題としたい。

注

- 1 英文中イタリック、翻訳文中小ポイント、ゴシック、斜字は原文のまま。
- 2 “Rendering Narrators’ Voices in *The Sound and the Fury*: An Analysis of Four Translations” *Asphodel* 54 同志社女子大学英語英文学会 2019 pp.78-102

参考文献

分析対象作品

- Faulkner, William. *The Sound and the Fury*. New York : Random House, 1990.
- 大橋健三郎 訳「響きと怒り」『新潮世界文学 41』東京：新潮社 1971
- 尾上政次 訳「響きと怒り」『フォークナー全集 5』東京：富山房 1969
- 高橋正雄 訳『響きと怒り』東京：講談社 1997
- 平石貴樹、新納卓也 共訳『響きと怒り』上下 東京：岩波文庫 2007

References

- Cowley, Malcolm. *Writers at Work The Paris Review Interviews*. New York : The Viking Press, 1958
- Faulkner, William. André Bleikasten ed. "Introduction to *The Sound and the fury*, 1933" *William Faulkner's The Sound and the Fury*. (Garland Faulkner casebooks ; V.1) New York : Garland, 1982.
- "That Evening Sun," *Collected Stories of William Faulkner*. New York : Random House, 1950.
- Hasegawa, Yoko. *The Routledge Course in Japanese Translation*. London and New York : Routledge, 2012.
- Humphrey, Robert. *Stream of Consciousness in the Modern Novel*. Berkeley and Los Angeles : University of California Press, 1954.
- Humphrey, Robert 『現代小説と意識の流れ』石田幸太郎 訳 東京：英宝社 1970
- 樋口万里子 「現在時制の意味機能」『九州工業大学情報工学部紀要』5巻 九州工業大学 1992 pp.75-99
- Jelliffe, Robert A. *Faulkner at Nagano*. Tokyo : Kenkyusha, 1956.
- Jendreyko, Vadim. 『ドストエフスキーと愛に生きる』2014. Documentary film
- 梶原佳子 「自己評価についての一考察 (2) : 幼児期の自己認識の発達について」『大阪大学人間科学部紀要』22号 大阪：大阪大学 1996 pp.399-410
- 文部科学省『諸外国の教育統計 2019年版』
- 野中 涼 「Faulkner の意識の流れ」『英文学研究』36(1) 東京：日本英文学会 1959 pp.109-125

Ross, Stephen M. and Noel Polk. *Reading Faulkner The Sound and the Fury Glossary and Commentary*. Jackson : University Press of Mississippi, 1996.

高村 薫「小説の現在地とこれから」『新潮』第115巻第6号 東京：新潮社 2018
pp.155-166

